

IV-8 沖縄

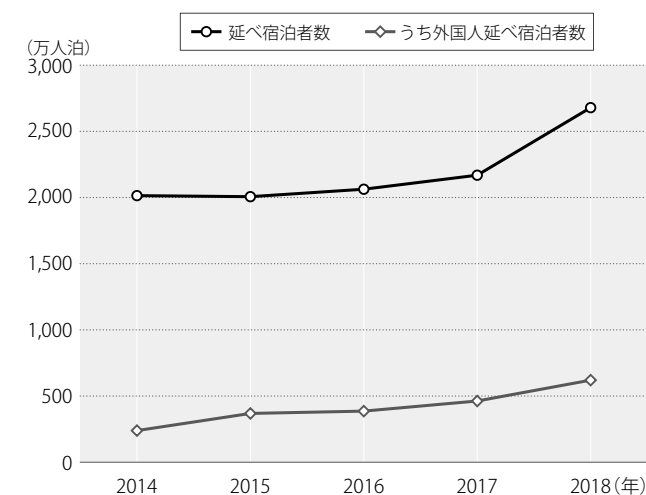
入域観光客数は984.2万人(暦年)で過去最多
1人当たり観光消費額は横ばいで推移

(1) 都道府県レベルの旅行者動向

観光庁「宿泊旅行統計調査」によると2018年1月～12月の沖縄の延べ宿泊者数は2,679万人泊となり、前年比23.5%増(510万人泊増)となった(図IV-8-1)。

一方、外国人延べ宿泊者数は620万人泊となり、前年比34.1%増(158万人泊増)で、延べ宿泊者数・外国人延べ宿泊者数のいずれも2桁の増加率となった。

図IV-8-1 延べ宿泊者数の推移(沖縄)



延べ宿泊者数	2,014	2,006	2,063	2,169	2,679
うち外国人延べ宿泊者数	239	368	386	462	620

単位：万人泊
資料：観光庁「平成30年宿泊旅行統計調査」をもとに(公財)日本交通公社作成

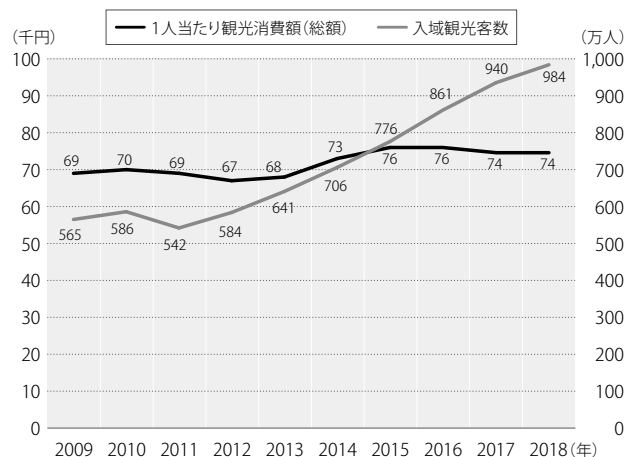
沖縄県が推計している「入域観光客数(含ビジネス客)」は、2018年(暦年)で984万2千人となり、前年比4.7%増(44.6万人増)と過去最多となった。ただし増加率は、2014年から2016年にかけて3年連続で前年比10%以上の伸びを示したものの、2018年は昨年に引き続き1桁の増加率に留まった(図IV-8-2)。

入域観光客数のうち、国内客は693万9千人(前年比1.2%増)、外国人客は290万4千人(同14.2%増)だった(図IV-8-3)。外国人客比率は拡大し続けており、2018年は29.5%と観光客全体の約3割を占めるまでになった。国籍別にみると、台湾89万0千人(前年比13.0%増)、中国63万2千人(同25.5%増)、韓国55万6千人(同6.2%増)、香港24万2千人(同5.6%減)、そのほか58万4千人(同23.9%増)で、中国の伸び率が最も大きく、初の60万人台となった。一方、香港は過去最高であった2017年を下回り、入域観光客数が減少に転じた。

観光客1人当たり圏内消費額は、73,673円となり、前年比0.4%減(同272円減)となった。

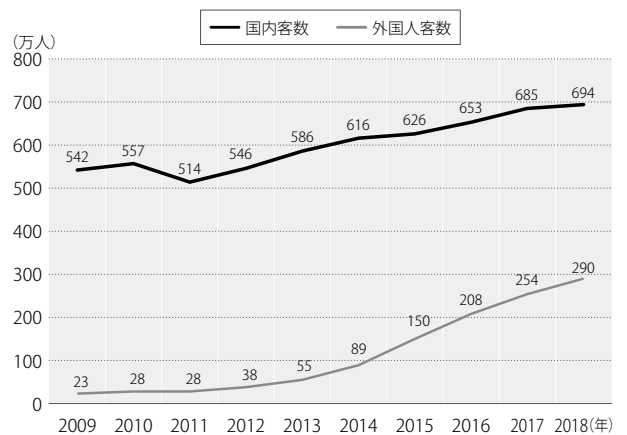
離島の動向をみると、沖縄県八重山事務所が公表している八重山地域の入域観光客数は、2018年(暦年)が138万0千人(前年比0.5%減)となりほぼ横ばい、一方、宮古島市が公表している宮古島の観光客数は111万人となり、前年比19.5%増(18万人増)と好調に推移した(図IV-8-4)。

図IV-8-2 入域観光客数と1人当たり観光消費額の推移



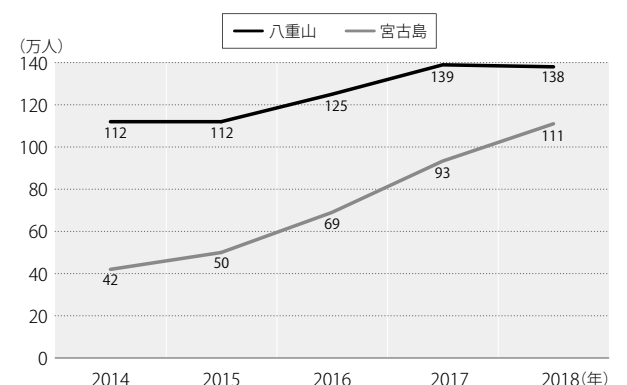
資料：沖縄県「観光統計実態調査」をもとに(公財)日本交通公社作成

図IV-8-3 国内客数と外国人客数の推移



資料：沖縄県「入域観光客統計概況」をもとに(公財)日本交通公社作成

図IV-8-4 八重山地域及び宮古島の入域観光客数の推移



資料：沖縄県「八重山入域観光客数統計概況(推計)」及び宮古島市「宮古の入域観光客数」をもとに(公財)日本交通公社作成

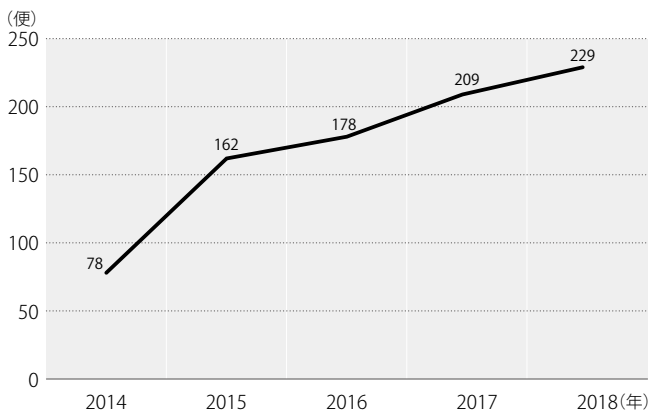
(2) 観光地の主要な動き

外国人客の増加に伴う入域観光客数の拡大を受けて、2018年も国際線の増便、宿泊施設及び商業施設などのオープンが相次いだ。

●国際線の増便

調査月が異なるため単純比較はできないものの、2018年6月1日時点の那覇空港及び新石垣空港の週当たりの便数は229便で、前年(2017年6月1日時点)に比べ9.6%増(20便増)となった(図IV-8-5)。主な内訳は、台北65便(提供座席数14,428席、石垣便を含む)、ソウル49便(同10,290席)、香港33便(同8,959席、石垣便を含む)、上海21便(同4,774席)、バンコク7便(同1,260席)などとなっている。

図IV-8-5 那覇空港及び新石垣空港(南ぬ島石垣空港)における国際線(直行便)の便数(週当たり)の推移



資料：沖縄県「観光要覧」をもとに(公財)日本交通公社作成

※ 2014年は4/1、2015年は9/1、2016年は8/1、2017年以降は6/1現在の便数を掲載。

※ 提供座席数は主な使用機材より独自に推計したもの。使用機材の変更などにより実際の提供座席数とは異なる可能性がある。

●宿泊施設の開業

2018年から2019年にかけてオープンした主な宿泊施設(名称変更などによるリニューアルオープンを含む)を表IV-8-1に示す。

外国人観光客を始めとした宿泊需要の高まりを受けて、那覇市内に「ティサージホテル那覇」(2018年4月)、「ノホテル沖縄那覇(旧沖縄都ホテル)」(同年9月)、「スマートコンド泊」(同年11月)、「グリーンリッチホテル那覇」(2019年3月)など、コンドミニアムタイプも含めたシティ・ビジネスホテルの開業が相次いだ。また、2018年5月開業の「ワイズキャビン&ホテル那覇国際通り」に続き、「グランドキャビンホテル那覇小禄」(2019年2月)が開業するなど、那覇市を中心にカプセルホテルタイプのホテルの開業も相次いでいる。

一方、那覇市以外の本島中北部、そして離島地域においても、引き続き多くの宿泊施設が開業しており、特に2018年から2019年は本島西海岸において、「ハイアットリージェンシー瀬良垣アイランド沖縄」(2018年8月)、「ハレクラニ沖縄」(2019年7月)など、外資系で300室以上を擁する大型のリゾートホテルが相次いで開業したことが特徴的であった。

表IV-8-1 2018年から2019年にかけてオープンした主な宿泊施設

年月	宿泊施設名	所在地	室数
2018年1月	HOTEL LOCUS	宮古島市	100室
1月	リンケンスホテル(リオープン)	北谷町	25室
3月	HOTEL Mr. KINJO IN MINAMIUEBARU	中城村	24室
4月	ティサージホテル那覇	那覇市	132室
5月	ワイズキャビン&ホテル那覇国際通り	那覇市	188室
6月	ラ・ジェント・ホテル沖縄北谷	北谷町	139室
6月	ダブルツリー by ヒルトン沖縄北谷リゾート	北谷町	160室
7月	ザ・ひらまつ ホテルズ&リゾート 宜野座	宜野座村	18室
7月	HOTEL Mr. KINJO IN FUTENMA	宜野湾市	21室
8月	ハイアットリージェンシー瀬良垣アイランド沖縄	恩納村	344室
9月	ノホテル沖縄那覇(旧沖縄都ホテル)	那覇市	328室
10月	Fスタイル・コンドミニウムナゴリゾートリエッタ中山	名護市	40室
11月	スマートコンド泊	那覇市	25室
12月	イラフSUIラグジュアリーコレクションホテル沖縄宮古	宮古島市	58室
2019年2月	グランドキャビンホテル那覇小禄	那覇市	150室
3月	グリーンリッチホテル那覇	那覇市	165室
4月	アラマハイナ コンドホテル	本部町	100室
5月	U-MUI Forest Villa Okinawa YAMADA GUSUKU	恩納村	18室
5月	the rescape	宮古島市	41室
6月	GLAMDAY STYLE HOTEL&RESORT OKINAWA YOMITAN	読谷村	54室
7月	ハレクラニ沖縄	恩納村	360室
7月	ホテルシギラミラージュ	宮古島市	160室
7月	フサキビーチリゾートホテル&ヴィラズ「ノースウイング」(リニューアル)	石垣市	150室

資料：新聞記事やホームページなどをもとに(公財)日本交通公社作成

●観光関連施設の開業

2018年から2019年にかけてオープンした主な商業施設・アミューズメント施設などを始めとした観光関連施設を表IV-8-2に示す。

2018年3月には沖縄市に「エイサー会館」が開業、沖縄の伝統芸能であるエイサー(旧盆に行われる先祖供養の伝統行事・本土の盆踊りにあたるもの)の歴史と文化を楽しみながら学べる体験型の施設となっている。沖縄県内のみならず、国内外の観光客に向けてエイサーの魅力を発信する施設として、雨天時に楽しめるスポットのひとつにもなっている。

また、商業施設「那覇オーパ」(2018年10月)、「琉球王国市場」(同年12月)、「オキナワ ハナサキマルシェ」(2019年3月)「サンエー浦添西海岸 PARCO CITY」(同年6月)が相次いで開業。沖縄及び日本の食や文化を売りにしたテナントを多く擁しており、増加する外国人観光客の旺盛な購買ニーズに対応した形だ。

一方、「食を通じてうるまを元気に」をコンセプトとした施設「うるまマルシェ」は2018年11月開業、うるま市を中心に沖縄県内各地の農家から届いた新鮮な野菜、沖縄近海で捕れた魚、畜産家が育てた食肉が並び、多くの地元客で賑わっている。同施設では、地域の食材を活用した食事を提供する期間限定のお試し出店が可能な「チャレンジブース」も設けており、同ブースか

ら誕生した商品が話題を呼び、メディアでの紹介やSNSでの拡散などを通じて、地元客のみならず観光客も多く集まる状況が生まれている。生産者、直売所、地元客、観光客がつながることで、地元の活性化に直結する事例として今後も活用が期待される。

表IV-8-2 2018年から2019年にかけてオープンした主な観光関連施設・アミューズメント施設

年月	施設名	所在地	概要
2018年2月	グラン・ブルーチャペル・カヌチャペイ	名護市	カヌチャリゾート内に新設されたウェディング施設。ガラス張りのチャペルからは海を一望することができる。
3月	ABLOうるま	うるま市	うるま市にオープンした複合商業施設。総敷地面積4万㎡にスーパーマーケット、レストラン、アパレル、DIYショップ等が入る。
3月	エイサー会館	沖縄市	沖縄の伝統芸能であるエイサーの歴史と文化を楽しみながら学べる体験型施設。無料ゾーンと有料ゾーンの2フロアに分かれる。
4月	沖縄石の文化博物館	国頭村	沖縄の石をテーマにした博物館。県内各市町村の岩石標本などの展示から沖縄の島々の地史的な成り立ちを学ぶことができる。
4月	道の駅ぎのぎ	宜野座村	沖縄本島東海岸唯一の道の駅として、2018年リニューアルオープン。大型遊具を新規整備した他、カヌー艇庫など体験基地としても機能。
9月	瀬良垣島教会	恩納村	ハイアットリージェンシー瀬良垣アイランド沖縄に併設されたデザイナーズチャペル。温もりのある木組み調の建物が特徴。
10月	那覇オーパ	那覇市	那覇バスターミナルと併せた再開発地区にオープンした大型複合商業施設。オーパは2013年の閉店以来、沖縄へ5年ぶりの再進出。
11月	うるまマルシェ	うるま市	うるま市を中心とした沖縄県内の農水産物の直売所。直売所以外にレストラン、フードコート、イベントスペース等を備える。
12月	琉球王国市場	那覇市	国際通りの旧沖縄三越百貨店跡にオープンした、食をテーマにした商業施設。飲食店を中心に約50店舗が出店。
2019年1月	「白の教会」(リニューアル)	本部町	ホテルオリオンモトプリゾート&スパに併設されたデザイナーズチャペル。幸せの木“ふくぎ”をモチーフにデザインされた。
1月	奏の教会/葵の教会	宮古島市	宮古島・シギリリゾートに同時オープンした教会。シギリビーチが目の前に広がる絶景が魅力となっている。
3月	オキナワハナサキマルシェ	本部町	本部町・アラマハイナコンドホテルに併設された複合商業施設。レストラン、カフェ、フードコートなどが出店。
6月	サンエー浦添西海岸 PARCO CITY	浦添市	浦添市に開業した大型商業施設。店舗面積約6万㎡、駐車場台数約4,000の建物に県内外から約250のテナントが入る。

資料：新聞記事やホームページ等をもとに(公財)日本交通公社作成

(3) 訪日客増加による県民生活への影響

2019年5月、沖縄タイムス紙面に「沖縄県那覇市牧志の「国際通り屋台村」の周辺住民から、客の声がうるさいとの苦情が寄せられている。市によると同地域は商業地域で、客の声がうるさいという騒音トラブルはこれまでに例がない。」との記事が掲載された(『沖縄タイムス』2019.5.20)。6年連続で入域観光客数が過去最多を記録し、入域観光客数1,000万人・外国人客数300万人が間近に迫る中、急激な観光客数の増加と県民生活との関係に注目が集まっている。

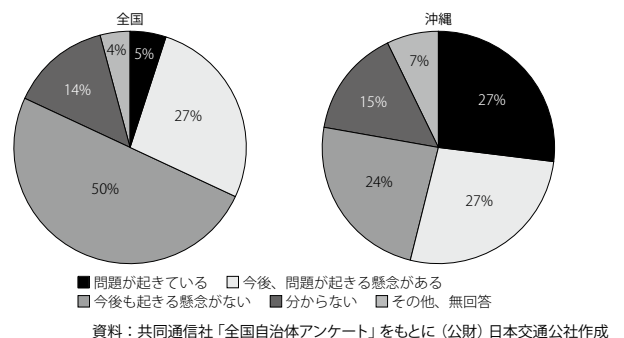
共同通信社が2019年5~7月に全国の市町村を対象に実施したアンケートでは、回答した1733市区町村のうち、日本を訪れる外国人旅行者の増加による住民生活への影響について、5%にあたる93市区町村は既に「問題が起きている」、27%

の465市区町村は「今後、問題が起きている可能性がある」と回答、半数50%の860市区町村は「今後も起きている懸念がない」とした。そのうち、沖縄県内に限って見てみると、「問題が起きている」と回答した市町村が27%・11市町村にのぼる一方、「今後も起きている懸念がない」とした市町村は24%・10市町村に留まり、各自治体でいわゆる“オーバーツーリズム”に対する認識・意識が全国よりも高まっていることが確認された。

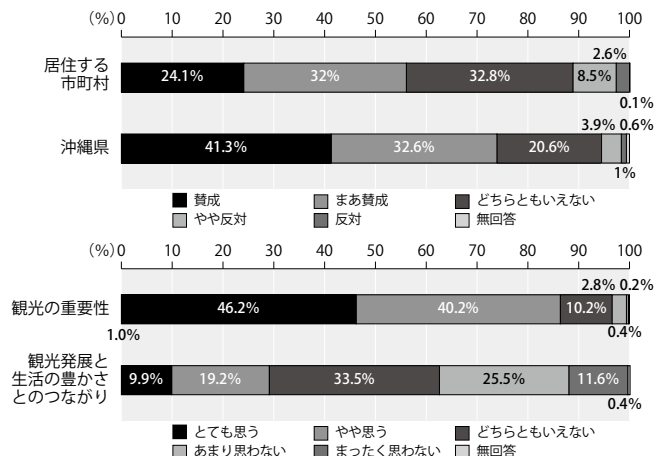
一方、沖縄県民の意識はというと、外国人観光客の来訪について、自身の居住地域及び沖縄県全体のいずれにおいても「賛成」と「やや賛成」の合計が過半数となっており、「やや反対」と「反対」の合計も概ね1割以下に収まっていることから、現時点で大きな拒否反応は出ていないと言える(沖縄県「沖縄観光に関する県民意識調査」2018年1~3月実施)。ただし同調査では、沖縄の発展に観光が重要な役割を果たしているかとの問いに、「とても思う」「やや思う」が合わせて86.4%と多数を占めている一方、観光が発展すると自分の生活も豊かになると思うかについては、「とても思う」「やや思う」と合わせて29.1%に留まり、観光の果たす役割が多くの人に理解されている反面、生活の豊かさにはつながっていないと考える人が多いことが課題として浮き彫りとなった。

こうした状況を踏まえて、沖縄県では、引き続き沖縄観光に関する県民意識調査を実施して、状況に変化がないか注視していく他、沖縄観光コンベンションビューロー(OCVB)とも連携して、観光振興の促進に向けて県民の理解を深めていくこととしている。

図IV-8-6 外国人客の増加による生活への影響



図IV-8-7 外国人客の増加に対する県民の意識



(中島 泰)